或問　WAKUMON 85
No. 8 (2004) pp.85～104

連載にあたって

16 世紀後半から中国にやってきたヨーロッパ人宣教師達、とりわけマテオ・リッチをその代表とするイエズス会の宣教師達は、そのキリスト教の布教のためには、徹底した「適応主義」を採用した。彼らは相手方の文化に身を置き、できるだけ相手方の風俗・習慣・思想を受け入れようとした。服装は中国服を身にまとい、ことばも中国語を操った。そして、最も崇高であるはずのキリストの図像さえ、「中国風」に変えてしまったのである。私はそれを「文化の翻訳」と名付けたが、そのことに気が付いたのは、1998 年にハーバード大学のホートン・ライブラリーで『天主降世出像経解』という書物を見た時であった。キリストの一生を描いたものであるが、その中国語の面白さに加え、そこに描かれている挿絵に思わず目を奪われたのである。それは、「原画」（その時には原画は見ていなかった）を模刻したものであることは容易に想像がついたが、以前に見ていた『程氏墨苑』に収められている絵と同様に、極めて中国的なそれであった。「陰」がないこと、話本や白話小説に見られるような「雲」や、格子窓等々、まさに、それは「中国画」そのものであったのである。その後、このことについて調べていくうちに、この書の他に『誦念珠規定』や『進呈書像』といった書物の存在や、その「原画」についても分かってきた。そして、この「適応主義」の行き着く先、つまり「昇華」として、ロバート・トームの漢訳イソップ『意拾喩言』が存在するという結論に至ったわけである。これらについては、詳しくは拙著『近代における東西言語文化接触の研究』（関西大学出版部 2001.10）や「再論「文化の翻訳」をめぐって――「聖像画」から見た中国文化への同化の現象」（『関西大学東西学術研究所創立五十周年記念論文集』関西大学出版部 2001.10）「中国化されたキリストの一生」（『或問』第 6 号 2003.5）を参照して頂くとして、ただ、その頃、ローマ大学のマシーニ教授やドイツのエアランゲン大学のラックナー教授からご教示頂いていたデリアの書物*については、その後、現物を入手したものの、イタリア語ということで全く手が付けられないままでいた。幸い、学部共同研究でフランス語の柏木先生とチームを組むことになり、柏木先生にこの書物の翻訳をお願いすることができた。ここに連載の形で本邦初訳として世に問うことが出来ることは大きな喜びである。もちろん、本来は、訳者註、さらに、私の補註を付して掲載する予定であったが、それは未だ果たせずにいる。今後の課題としておきたい。

（内田慶市）

* M.D'elia, S.I.P.Pasqual. *Le Origini Dell'arte Cristiana Cinese* 1583-1640, 1939.

『中国キリスト教美術の起源（1583年～1640年）』

イエズス会　パスクワーレ・M. デリア
柏木　治　訳（初稿）

緒　言

1934年夏、イエズス会ローマ資料館で古文書をあさっていたら、偶然『中国教理問答』なるものに巡りあった。文書係の覚書によれば、1600年ごろにまでさかのぼるという。1600年以前に書かれた唯一の『中国教理問答』が、1584年11月末に肇慶で出版されたイエズス会士ミケーレ・ルッジェーリによる『天主實録』であることはよく承知していたので、さてこれは何なのか見たくなった。じつはわたしが目にしていたのは、イエズス会士ジョウァンニ・ダ・ロッチャ師の『中国教理問答』で、『天主聖教啓蒙』と題され、同じ著者による『ロザリオ教本』、すなわち『念珠規程』といっしょに綴じられていた。両者とも1620年ごろの著作である。したがって、文書係はこの本に20年ばかり早い日付をつけていたのだ。

この失望――失望といえるものがあったとして――をほとんど埋め合わせてくれるかのように、わたしは『ロザリオ教本』をぱらぱらめくりながら、すべての挿絵が――しかもそれらはゆうに14葉に達していた――中国様式の好みによっていることに気づいた。全体の装飾が中国的雰囲気に調和しているばかりか、イエズス、聖母、使徒、天使など、中国人でない人物までが中国風の顔つきと衣服をまとって表現されていたのだ。中国におけるキリスト教美術の起源史にとって重要とみなされてよい遺物のうえに手を置いた気がした。それゆえ、もっと時間をかけてこの遺物を研究できるよう、何枚かの写真を撮らせたのである。

わたしはこの写真を、キリスト教美術と中国芸美術に造詣の深いかの高名な人物、チェルソ・コンスタンティーニ猊下に見せた。元中国教皇使節であり、現ローマ布教文書省書記官である。猊下はこれにいたく喜んだ。というのもこの発見は、中国におけるかつてのイエズス会宣教師たちが、他の多くの点におけると同様、美術の脚色という点でも時代を先取りし、進むべき道をわれわれに示していたことを証拠立てていたからである。ところが猊下自身にも、これとよく似たものをすでにヨーロッパの古い版画本のなかで見たような印象があった。実際、イエズス会士ヒエロニムス・ナダールの死後出版の書、すなわち有名なプランティン印刷所の活字で刷られ、1595年にアントワープで刊行された『福音書の注解と瞑想』（*Adnotationes et Meditaiones in Evangelia*）

にある版画とわたしが撮った写真をつき合わせてみて、ほかならぬこれが中国の画家のインスピレーションの源であったにちがいないことを2人ともすぐに確信したのであった。そういうわけでわれわれは、約4半世紀のちに中国で作成された模写とあわせてオリジナルのほうをも出版するのが適当だと思ったのである。

このような出版物にいちばん適した場を考えていて思いついたのは、イタリア王立アカデミーに頼んでみることだった。アカデミーは、これらの遺物に資料を付して出版することに、17世紀第14半世紀以来の東西接触の環を見、この申し出を快く受諾してくれたのであった。

以上が小論の簡単な由来である。

16世紀末および17世紀初頭の最初の宣教師たち――その大部分はイタリア人――によって、幾千年もつづくいにしえの「中央王国」（中国）にもたらされた文化的・芸術的貢献を、願わくばこの小論がもっとよく知らしめるに役立ってくれればと思う。

ローマ、グレゴリオ教皇大学、1939年1月6日

イエズス会　パスクワーレ・M. デリア

書誌略号

ARSI = Archivo Romano della Compagnia di Gesù〔イエズス会ローマ資料館〕

COURANT, *Catalogue des livres chinois, japonais et coréens*, Parigi, Leroux, 1900-1910.〔クーラン『中国、日本および朝鮮書籍目録』パリ、ルルー、1900～1910年〕

Iücom = 禹貢 *The Chinese historical Geography Magazine*, 1936, Peiping (= Pechino) 11 aprile. Vol. V, NN. 3-4.〔『中国歴史地理雑誌』1936年、北京、4月11日、第5巻3～4号〕

MHSI = *Monumenta Historica Societatis Iesus*, Madrid.〔『イエズス会歴史記念碑』マドリード〕

PFISTER, *Notices biographiques et bibliographiques sur les Jésuites de l'ancienne mission de chine (1552-1773),* Shangai, 1932-1934.〔プフィステール『旧中国使節団イエズス会士に関する伝記的および書誌的略述（1552～1773）』上海、1932～1934年〕

R. = *Opere storiche del P. Matteo Ricci, S. I.* edito dal P. Pietro TACCHI VENTURI, S. I., Macerata, 1911-1913〔『イエズス会士マテオ・リッチ師の歴史的著作』イエズス会士ピエトロ・タッキ・ヴェントゥーリ師編、マチェラータ、1911～1913年〕[1]

---

[1] この『著作』の新版が、この著者の編集で全面的に改訂され大幅に増補されて、現在ローマの国家印刷局の活字で印刷中である。この本には、本文に触れられている人名・地名の文字、すなわち中国語表記記号のみならず、中国研究および歴史的内容の豊富な註記、さらには、最近になってこの同じ著者が発見した、これまでに知られていない資料の複写が載せられる。豊富な解説が付されるため、『著作』の旧1巻は、おなじ大きさの、あるいはさらに大版の2巻本となって出

【註記】ローマ字表記、すなわち中国語の単語をラテン文字に発音表記するにあたって、近著『イエズス会士マテオ・リッチ師の世界地図』(翻訳解説・注釈付、ヴァチカン市、ヴァチカン教皇文庫、1938年、XXIII-XXVI頁)でわたしが示したのと同様の規則に従った。

第1章 こんにちの問題か、それとも古い問題か

ここ数年来、西洋でも東洋でも、布教国の土着芸術をいかにしてカトリック信仰の要請に適合させるかが議論されてきた。

この問題に通じた人たちは、カトリックの教義と信仰を芸術的に表現するにあたって、たとえば東洋に西洋独自の芸術的形式と意匠を持ち込むよりも、さまざまな民族のあいだですでに馴染んでいる芸術的形式と意匠を利用するほうが好都合ではないかと問うた。この人たちの考えでは、教会、彫像、絵画、壁掛け、崇拝の対象となる物など、およそ人間の神に対する宗教感情の感知可能な顕れは、土地の空気と調和すべきだというのである。そうすることによって、教会はある意味でもっとカトリック的になるように思われるのだ。というのも、さまざまな民族がもっている美しいものと善いもののすべてを活用して、同じ1つの神を崇敬し、同じ宗教的真実を象徴化することになるからである。したがってかれらは、ヨーロッパの宣教師たちに、自分の生まれた土地のみならず西洋芸術に対する好みも捨てるように、さらに、こうして新しい信者が芸術上の嗜好とシンボリズムにおいても中国なら中国人のまま、インドならインド人のままにある程度までとどまれるように求める。こんなふうに芸術表現の多様性があったほうが、教義の統1はよりたやすく達成されるというのである。

こうした主張のもっとも有名な代表者のひとりは、チェルソ・コンスタンティーニ猊下であったし、いまなおそうである。こんにちヴァチカン布教文書省書記官であり、この人の教会芸術についての権威はあまねく承認されている。かれは1922年に第一中国教皇使節に任命され、10年以上にもわたる疲れを知らない実り多き仕事のあいだ、中国人のもとで多くの功績をおさめたが、これに加えて、中国芸術をキリスト教芸術にいかに適合させるかという問題を間近から研究するという、これまた小さくない功績を残した。

猊下は、1922年に中国に着いたとき、中国の大都市に西洋の手本をもとに設計され建立されている教会を見て、芸術家としての、同時に宣教師としての心に多くの疑念と留保が生じた、と語っている[2]。到着してほんの数ヶ月後に、2人の使節団長にある計画についての手紙を書き、

版されるだろう。望まれるとおり、外地でのこの偉大なイタリア人の仕事をさらにきちんと例証すべく、かなりの巻があとに続く予定である。

[2] 『キリスト教美術における布教美術の問題』1936年、33〜62頁。本文で言及されている手紙と、この問題に関するほかのいくつかの重要な資料および研究が、『司教会議報告集』(北京)の1932

自分の見方を説明しながら、土着芸術をキリスト教芸術へ適合させる道を構想した。

とくにかれが主張したのは、つぎの4点である。

(1)　中国における西洋美術は様式上の誤謬である。というのも、西洋を東洋に移植するものであり、これはそもそも食い違いなのだから。

(2)　西洋美術の導入は、異教徒にカトリック教が外来宗教であると非難する口実を与える可能性がある。

(3)　初期教会の伝統は、さまざまな国にみられる様式を採り入れることをわれわれに教えている。

(4)　中国様式はとくに、壮麗で優美な装飾をもっており、カトリック信仰の要求にもっともよく合致しうる。

この高名な高位聖職者は、そうたやすいことではないが、1923 年からこれまでこの主張をいっそう明解に、そしていっそう説得的なものにしてきた。いずれにせよ、とくにかれの努力のおかげで、土着のキリスト教美術に対する考えがおおいに進歩を遂げたのである。

くわえて、教皇座は早くもさまざまな機会にこの運動に好意的な態度を表明した。そして最近では、1937 年 9 月 14 日、教皇が次回の土着美術展を 1942 年にヴァチカン宮で開くと予告することで、教会がこの問題についてどう考えているかを十分に知らしめた。ある折に布教文書省長官フマゾーニ・ビオンディ枢機卿に送った手紙のなかで教皇ピオ 11 世は、「あらゆる民族の文化と特徴を表す自由な芸術」について好感をもって語り、それらは「教会が神への信仰を表現するのをますますもって助ける」と宣言した。さらに教皇はつぎのように予見している。予告した展覧会において、教会は「神の掟に反しないかぎり、あらゆる種類の無辜の芸術とその原理、その約束事と習慣の保存に努める」ことが理解されようから、教会の普遍性はいっそうはっきりするだろう、と[3]。

しかしながら、ともすればこうした運動は昨日はじまったばかりのように、そしてまた、土着のキリスト教芸術の問題は最近まで検討されたためしがないかのように思われがちであった。

このような印象は歴史的にみて誤りである。それどころかこの問題は、幾人かの卓抜なイエズス会宣教師によって、中国での布教の初期から議論されていたばかりか、「今日的なやりかたで」解決されていたのである。

以上の推論を論証することをもって小論の目的としたい。

年の第 5 号 (5 月) に見いだせるであろう。これは、すべて中国キリスト教美術に充てられている。

[3] 『教皇座議事報』、ローマ、1937 年、413～415 頁。

第2章　マテオ・リッチ師の適応精神

周知のように、今日の中国の布教は、布教の歴史における一等星ともいうべきかの高名なマチェラータのマテオ・リッチ師（1552～1610）とともに始まった。もう1人の傑出したイタリア人宣教師、広い視野と不屈の精神をもつ人物、キエーティのアレッサンドロ・ヴァリニャーノ師（1539～1606）[4] は、極東すべての宣教団の派遣特使、すなわち上司という資格でリッチの案内役となった人物だが、この人の助言と支えによってリッチは、中世にフランチェスコ派の修道士たちによってすでに導入されていた福音伝道が2世紀以上にわたって中断していたあとをうけて、1583年9月10日、中国に十字架を再移植することに成功、広東地方の肇慶市に身を落ち着けたのであった。6年後の1589年にはさらに奥地に進み、同じく広東地方の韶州、ついで1595年には江西地方の南昌、さらに1599年には南京、1601年ついに北京にそれぞれ宣教団を創設し、この地で1610年5月11日に没した。今日、135の中国宣教団が創設者としてかれに敬意を表している。

リッチとその仲間、さらには直接の後継者たちの伝道方法を特徴づけていたのは、使徒聖パウロの簡単かつ崇高な計画を中国人に対して実践しようとする誠実で弛まぬ努力であった。すなわち「わが身すべてをみなに合わせること」、したがって、中国人に対しては中国人になる、ということである。

---

[4] 広大な布教地域におけるすべての時代、すべての国を通じてかれは天才の1人である。1539年2月20日にアブルッツォのキエーティに生まれ、1557年に法学士となり、1566年5月27日ローマのイエズス会に入った。1571年に司教に任ぜられ、1573年8月にインドから日本までのすべての布教団の派遣特使、すなわち上官を命ぜられた。1574年3月9日、リスボンを出発し、同年9月6日ゴアに到着、そこで上官としての並はずれた活動に着手した。1575年から1577年にかけて、インドのすべての宣教団を訪問。ついで1578年8月にマカオに着き、1579年7月にそこから再び出発して日本へ向かうが、それもマカオにプーリア出身のミケーレ・ルッジェーリ師を来させることで、中国における未来の宣教団の最初の基礎を置いたあとのことあった。日本訪問を終え、1582年3月9日、マカオに帰還し、そこに中国宣教団の創設者とすべくリッチをインドから呼び寄せる。1583年にインドに帰ると、かれは教会管区長になった。1587年、再び東洋派遣特使に選ばれ、2回目の日本への旅に就く。1588年4月22日ゴアを出発、マカオに1588年7月28日から1590年6月23日まで滞在、この年の7月21日に長崎に着いた。1592年10月9日、日本を出発し、再度マカオに1592年10月24日から1594年11月15日もしくは16日まで滞在、再びゴアへの帰路に就き、そこに到着したのは1595年3月4日である。ところがすぐに中国と日本の派遣特使となって、1597年4月23日に日の出る国への3度目の旅に立ち、1598年8月5日に到着、1603年1月15日までその地にとどまる。そこを出発してマカオに帰るのは2月10日、1606年1月20日、マカオで没した。――現在まで残っている260通の未発表オリジナル書簡のなかでのアレッサンドロ師はけっしてヴァリニャーニ（Valignani）と署名していない。同時代人（その筆頭がリッチだが）もまた、かれをヴァリニャーノ（Valignano）と呼ぶであろう。このことは、わたしがこの時代の約400の未発表資料を通覧して確信しえたところである。

かくして最初からリッチとその同志ルッジェーリは、「僧」の名と服装を採りいれた――もっとも、のちに経験から中国の上流社会階層がこれらの僧を軽蔑していることを知るにおよんで、両方とも捨て、文人の名と服装をとることになる――。さらにそのために、中国の食べ物以外の食べ物を知らなかったし、中国語以外の言葉を使わなかった。最初の不幸な経験のあと、かれらは中国様式で建てられた家に住み、ほかに適当な名前がないので、「寺」（pagoda）もしくは「堂」（sala）[5] という名前をもつ場所で礼拝ミサを挙げた。1583 年 2 月 7 日、肇慶に身を落ち着けることになる 7 ヶ月前にすでにルッジェーリは、「要するにわたしたちは中国人になったのです、キリストによって中国に利益を施すために」[6] と総会長クラウディオ・アックァヴィーヴァに書き送っている。そして 1599 年 8 月 14 日、イタリアから大々的な改宗の報告を求めてきたヨーロッパ人の同僚に対し、リッチはこう答えた。「ご承知ください、〔中略〕この地に身を置くわたくしをはじめ、ほかの者たちもみな、わが祖国と親しき友を捨て、すでに中国服に袖を通し、中国の履物を履いたのです。中国の習慣にないものであれば、わたしたちはこれを話さず、食さず、飲まず、わが家ともいたしません。」[7]

この最初の時期に、ふたりの西洋人にとってもっと重要だったのは、外国人という烙印にもかかわらず中国人に支援してもらうこと、そして、とうぜん猜疑心がつよく、宣教師が侵略者の前衛部隊を代わりをしているのだと容易に信じこむ人たちの偏見を打破することであった。「人民、そしてそれ以上に国王がこの人びと〔外国人〕に対して、大きな恐怖を抱いています。国王はいうなれば暴君であり、その先祖たちは武力でもって国を簒奪したのに、です。国王はまた誰かに王位を簒奪され、もっていかれやしまいかと恐れているのです。ですから、わたしたちとともに集まったかなりの人数のキリスト教徒はみな、中国においてはこの世でもっとも疑わしきものとなるでしょう。」1599 年 8 月 14 日、リッチは以上のように書いたのであった[8]。したがって、何よりもまず「この人たちの信用を勝ち得、すべての疑念を払拭すること、そしてそのつぎに彼らとともに改宗へと入っていくこと」[9] こそが最善であった。

この目的のために、聖パウロがギリシャ人にまだ知られていなかった神を唱導しようと、アテ

---

[5] 「寺」（pagoda）は仏教礼拝が実践される社であり、これに対し「堂」（sala）のほうは儒教者のための会合場所であった。7～8 世紀のネストリウス派の信徒たちも「寺」という単語を使っていたことを指摘しておくのは、意味のないことではない。実際、かれらの教会は 638 年から 745 年まで「波斯胡寺」（Pagoda straniere persiane〔ペルシャ外国寺〕）と呼ばれ、745 年以降は「大秦寺」（Pagode del Gran Zzin〔東地中海寺〕）と呼ばれたが、これはかれらの生国に由来している。

[6] *R.*, II, 416.

[7] *R.*, II, 246.

[8] *R.*, II, 247.

[9] *R.*, II, 247.

ネの大アレオパゴスの丘の前で詩人アラートスのいくつかの詩篇を巧妙に解釈し利用することさえためらわなかったのを真似て、リッチはイエス・キリストの福音書を説くのに中国の哲学者の言葉を使った。1595年11月4日、かれは総会長にこう書いている。「わたしたちは、われらが神聖なる信仰の問題をかれらの書物によっても証明したいわけですから、ここ何年かのあいだに何人かの立派な先生から『四書』*tetrabiblio*[10]、さらには『六經』[11]を釈義してもらいました。そして、われらの信仰の問題にとって好都合な多くの章句がこれらすべての書物にあることに気づいたのです。たとえば、神の単一性、魂の不死、福者の至福などの事柄です。そしてわたしがこの文人たちと話すとき、どれがかれらの教義なのかを尋ねることを常とし、それを通してわたしが証明したいと思っていることをかれらに証明するのです。こうして〔中略〕わたしは信仰の問題にうまく着手したのでした。」[12]

第3章 マテオ・リッチ師によって中国に輸入された西欧絵画

この共感的理解の態度は、リッチとその同士にあっては、たんに中国人のあいだにくり広げる布教の直接的な方法にとどまらず、ある全的な心性を反映していて、それは節度、福音を説くべき民衆へ尊敬、さらには「わが身をすべてみなに合わせる」という自発的な希求からなっていた。したがって、たとえば美術のように、直接布教活動に関わりがなくてもまったく無関係とはいえない素材からそれが展開していくのもとうぜんであった。

中国での滞在の最初の時期から宣教師たちは、中国人のもとでの布教活動にとってヨーロッパの版画や絵画がどれほど役に立つかを予感していた。まだリッチが到着する以前から、先駆者ルッジェーリは総会長エヴェラルド・メルクリアーノに「絵入り4カ国語聖書（図版つまりは挿絵入り）」を、さらには「新・旧約聖書の絵」[13]を要求している。皇帝に贈り物として届けるためである。

p. 19の絵

マテオ・リッチ師によるものとされる絵画

---

[10] *Tetrabiblio* とは典拠となる「4冊の書」、つまり『四書』のことであり、「偉大なる学問」すなわち『大學』、「中道」すなわち『中庸』、「孔子の学」すなわち『論語』、「孟子の書」あるいはごく簡単に『孟子』を指す。

[11] 『六經』*Sei Dottrine* に含まれるのは、『易經』*Libro dei Cambiamentit*（変化の書）、『書經』*Libro degli Annali*（年代記）、『詩經』*Libro delle Odi*（頌歌の書）、『禮經』*Libro dei Riti*（儀礼の書）、『樂經』*Libro della Musica*（音楽の書）、さらに『春秋』*Primavera e Autunno*（春と秋）と題された「孔子の年代記」である。

[12] *R.*, II, 207. I, 133, 2673 照のこと。

[13] *R.*, II, 404.

p. 20 の説明

1933 年 12 月、北京のジョン・C・ファーガスン博士は、寛大なことにこの写真をわたしに下さり、親切にも以下のことを知らせてくださった。

「この絵の写真は、1916 年 2 月 21 日、〔北京の〕琉璃廠地区の修古齋によってわたしのもとにもたらされたのですが、かれが言ったところでは、別に右公府の名で知られている、乾隆帝時代の恭王府のコレクションに由来するとのこと。このコレクションには、多くの興味深い標本がありました。この商人が言うには、君主の宮廷ではこの絵はマテオ・リッチによって描かれたと信じられていました。」

リッチとルッジェーリは広東省南部の肇慶に 1583 年 9 月 10 日に到着していたが、西方の国から中国に来たのだと言い、より適切な用語がなかったので――というのも中国人にとってヨーロッパは未知だった――その国を天竺王国と呼んだ。中国人が自分たちからみてより西に位置する王国、すなわちインドを指して呼んでいた名前である[14]。こんにちでも宣教師の身に降りかかることだが、ふたりの外国人は海岸地方の大都市を離れて中国内陸部へ入り、自分たちの顔、衣服、とくに髭など、持ちものすべてがどれほど中国人の好奇心をかきたてるかを経験的に知る。なにしろはるか昔の 1587 年 9 月、肇慶の町でのこと、これはいかばかりのことであったろうか。リッチはこの事実を適切に書いている。「中国ではまだ一度も目にしたことのないたいへん珍しいものに集まってくる人の群れたるや、ものすごかった。そのため、よそ者の神父を見に来た人びとで〔神父のいた〕その場所がいっぱいになり、この知事たちは 1 歩も踏み出せないありさまだった。」[15]

人びとの群れは、2 人の外国人の顔を見るのにすでに多数であったが、神父が自分でもってきたヨーロッパの品、たとえば西洋の美術品、とくに絵を見せはじめるといちだんと増加した。この異常なまでの人の集まりは、リッチ自身がその理由をわれわれに教えてくれる。中国人における美術についてかれはこう書いている。「絵画を愛好する中国人ではあるが、われわれの絵画には及ばない〔中略〕。油を使って描くすべも知らなければ、描く物に陰を与えるすべも知らないのだ。だから、彼らの絵はすべて弱々しく、まったく生彩に欠けている。」[16]

---

[14] わたしは別のところ（『イエズス会歴史紀要』、ローマ、1934 年、212～218 頁）で、1583 から 1588 年までの初期中国宣教師の文書における天竺=インド=ヨーロッパの問題について論じた。

[15] *R.*, I, 127.

[16] *R.*, I, 16. 画家袁棟も『書隠叢説』の中で、『畫鑒』（絵画の鏡）のつぎの言葉に言及している。「ヨーロッパ人マテオ・リッチが残した絵画には空虚と充溢がある、そして家屋には明の部分と暗の部分がある。」こうしたことのすべてがかれらに「ヨーロッパの技巧は真に偉大である！」と叫ばせるのだ。「今所傳者、乃欧羅巴人利瑪竇所遺、畫像有拗突、室屋有明暗也、甚矣、西洋之巧

とはいえ、中国では絵画は何世紀も前から知られていた。紀元前5世紀にまでさかのぼる孔子の作品がすでに、ある肖像画の存在を暗示しているようだ。いずれにしても、いまに知られている中国最初の画家、紀元3世紀に生きた曹弗興なる人物についての確たる資料をわれわれはもっているのである[17]。しかし、これらの中国人画家たちには遠近法の観念がまったくなかった。

肇慶のやじ馬の集まり——そしてこの町の住人すべてがやじ馬であった——は、したがって、「神父らが総督に贈物として贈呈するのに見せたヴェネツィアの三稜鏡[=プリズム]、そして《ローマでみごとに描かれた聖母の小聖画像》とともにさらに膨れ上がった。これらの品にみな呆気にとられっぱなしだった。そして、官吏らがこれらの品を見て満足げな様子をみせると、この驚きの品を見たいとますます人びとの数が増えた。知事はこれらの品を家の者たちにも見せたいから館まで運んでくれと頼んだ。で、神父らはそれらをかれのもとに送り届けた」[18]。

ほんの数日後、同じ絵かよく似た絵が神父らによって小さな礼拝堂の祭壇のうえに置かれた。そこに描かれていたのは「幼子を腕に抱く聖母」であった[19]。この絵は多くの訪問者に感銘を与えたので、官吏、文人、民衆、さらには僧にいたるまでがみな、「深い敬意をもって跪拝し、額が地面につくまで体を曲げる」[20] 中国方式でこの聖母を崇めた。これは崇敬の最高の印であった。要するに、万人が「われわれの絵画の技巧に感嘆した」[21] のである。

しかしまもなく、この憐れむべき異教徒の側に神父らが予想しなかった不都合が起こった。これら西洋人の神はひとりの婦人であるとかれらが信じたのである[22]。そこで「しばらくしてから、聖母の代わりにべつの救世主（の絵)」、たぶん「じつに美しい、P. ヨアン・ニコラーオ[23] によ

也、然豈獨一畫事哉。」禹貢 79b による引用。

[17] Giles, *A Chinese Biographical Dictionary,* Shanghai, 1898, N. 1997 3 照。

[18] *R.,* I, 127.

[19] *R.,* I, 131.

[20] *R.,* I, 132.

[21] *R.,* I, 132.

[22] このような信仰は、少し後にも中国人の著述家のあいだに見いだされるだろう。たとえば、ヨーロッパ絵画の研究者である焦秉貞はつぎのように報告している。「張庚はこう言った、『明の時代、中国語に秀でた西ヨーロッパ人マテオ・リッチは、南京に来て、正陽門近く西営に住んだ。かれは自分の宗教の創始者の絵をなした。すなわち天主像、腕に幼子を抱きかかえた婦人である。畫其教主、作婦人抱1小児、為天主像。その表現は完璧で、色彩は生き生きとしており、ひとを魅惑するものであった。かれはよくこう指摘していた、《中国人は浮き彫りになったものしか描く術を知らない。したがって、遠近法がないのです。わたしの国では、浮き立つものと同じように奥まったものも描きます。これによって、絵画は完璧になるのです。側面が陰の中にありながらそれぞれの顔が人目を引くわけだから、陰のなかのものは少々黒っぽく色づけすることで、顔がより浮き立つのです。》』。禹貢, 79b.による引用。

[23] ジョヴァンニ・ニコラーオ師は、日本におけるイエズス会絵画学校の創設者であった。1560年

る大きな板絵を（祭壇のうえに）置く」[24] ことになる。この絵は日本の副管区長ガスパル・コエーリョ[25] によって中国の宣教師に贈られたものであった。

にナポリ、より正確に言えばノーラに生まれ（マラッカから総会長アックァヴィーヴァに宛てたフランチェスコ・パージオの手紙、1582 年 6 月 22 日、*ARSI, Goa,* 13, f. 82）、1577 年 12 月にイエズス会入りして、1581 年にゴアに向けて出発した。1582 年 4 月 26 日、フランチェスコ・パージオとほかに日本に行く 4 人の宣教師とともにゴアを離れ、6 月 24 日、マラッカに到着した。7 月 3 日、さらにマカオに向けマラッカを発ち、パージオ、リッチ、ほかに 5 名とともに 8 月 7 日、マカオに到着。マカオにいるあいだ、かれは救世主の絵をなした。これは、1583 年 2 月 13 日、パージオが「ジョヴァンニ・ニコラーオが描いた救世主の聖画像」（COLIN-PASTELLS, *Labor Evangelica,* バルセロナ、1900、I、320、註）を求めていたとき、肇慶にほしいと願った絵である。ふたたびマカオを 1583 年 7 月 9 日に出発し、旅仲間ピエトロ・ゴメスが 1583 年 11 月 2 日の手紙で証言しているところによれば（*ARSI, Jap-Sin.*, 9, f. 177）、日本の長崎に同月の 20 日に着いた。そこでかれは道徳神学を 1 年間研究した。1592 年にも志伎の邸（天草）でこれを研究しているが、そこでかれは日本の若者に絵も教えた。何年のことがわからないが、1592 年より後、そして 1601 年より前に司祭に任じられたかれは、有馬に行かねばならず、そこで 1601 年、14 人の dogici？に絵画を教えた（PAGES, *Histoire de la religion chrétienne au Japon depuis 1598 jusqu'à 1651,* パリ、1869 年、I、45）。1603 年には、長崎で絵画学校の校長をしながら、指導司教補佐の位に昇格した。当時の目録には、満足できるものとはほど遠い記述が 1 つある。「絵画学校の学監ヨアン・ニコラーオ師は、告解するにじゅうぶんな言葉は知っている」。1614 年 11 月の目録は、かれについてつぎのように言っている。「知識は並以下」。さらに加えて「平凡な能力、判断力、思慮、経験、学識、すべて並以下。激しやすく、多血質。告解したり人と接したりする能力、並以下。」（*ARSI, Jap-Sin.*, 25, ff. 91 *b*, 97, 114）。それでも、かれは優れた画家であった。かれによって創立された絵画学校は 1592 年から 1601 年にかけて志伎にあり、1601 年には有馬、1603 年から 1613 年には長崎にあった。そこからマカオに移り、しばらく中断したあと、1620 年までにはふたたびマカオに戻った。ニコラーオは日本で、副管区長ガスパル・コエーリョが 1586 年に中国使節団に送る（*R.,* I, 158）べつの大きなきわめて美しい救世主の絵と、「銅板に油で描いた」聖ステーファノ（*R.,* I, 159）（たぶん聖ロレンツォとすべきだろうが（*R.,* II, 176, 186, 210））の小像をなした。さらに、1603 年 1 月にも同じ中国使節団が日本の絵画学校由来のきわめて美しい作品のいくつかを受け取ったといわれている。ニコラーオについては、以下を見よ。SCHURHAMMER, *Die Jesuitenmissionare des 16 und 17 Jehrhunderts und ihr Einfluss auf die japanische Malerei* in « Jubiläums-Band », 1933 der « Deutschen Gesellschaft für Natur-und Völkerkunde Ostasien » 東京。*T'oung Pao,* 1920-1921, 7. 『使節団歴史誌』*Revue d'Histoire des missions,* 1935, 208.　von SEPP SCHÜLLER, *P. Simon a Cunha und die ersten Jesuitenmaler in Macao* in *Die katholischen Missionen,* Bonn, 1936, 122. ニコラーオの学校で教育を受けた何人かの日本人画家とそのいくつかの絵画をめぐっては、この最後にあげた著者のもの、123 以下を見よ。

[24] *R.,* I, 158.

[25] ガスパル・コエーリョは、1531 年、ポルトガルのポルトに生まれ、1556 年 3 月にゴアのイエズス会に入った。インドで 15 年間過ごしたあと、1571 年、日本に派遣され、多くの者を改宗させた。1581 年末、ヴァリニャーノが日本を副管区に昇格させたときに、コエーリョを最初の副管区長に任命した。かれの指揮のもとで、1587 年 8 月 24 日、秀吉側からの最初の迫害が勃発した。1590 年 5 月 25 日（一説には 7 日）59 歳（うち日本で 19 年）に日本の加津佐で没した。以下を 3 照の

結局のところ、中国人とともに形成された経験は実り多いものであった。ほんの数ヵ月後、すなわち1584年1月25日にルッジェーリが、新たに総会長となったクラウディオ・アックァヴィーヴァに対し、一段の配慮を得ようと総会長がかつて自分の「父であり、師であり、上司」であったことを思い起こさせながら、つぎのように力説したのも頷ける。「かの中国の殿様方がつよく所望している、よく描けた聖母と救世主の銅版聖画をいくつか、そしてわれらが信仰の秘儀を描いた紙の聖画をいくつか」送ってもらいたい。「もっと簡単にそれを示せるように、そして（中国人が）絵画に対して多大な関心をもつように」[26]。

1585年の末ごろ、神父らは浙江・上虞生まれの新しい肇慶の知府、鄭一麟進士に、1幅の聖母マリアの絵を贈った。贈物におおいに満足したかれは、この婦人にどのように仕えたらいいのかを神父らに訊いた。聖画の前に跪くことが教えられ、品行方正な生活を送るようにと勧められた。この返答だけでは十分でなく、ちょうど北京に行かなければならなかったかれは、感謝の気持ちから大声でこう言った。「旅のあいだ、このご婦人にどうお仕えしたらよいのかをお教えいただけるよう、どなたかわたしと道をともにできる神父をお与えくださらんか。」もちろん、神父らは同伴することを申し出た。しかしながらこの時は、ほかに困難が生じて事は妨げられた[27]。

ほどなく、べつの絵がイタリアとスペインからわれらが開拓者にむけて発送された。1586年、総会長クラウディオ・アックァヴィーヴァは、「あらゆる困難を乗り越えて、着手されたことを続行するよう」士気を鼓舞するために、「ローマから優秀な画家の手になる救世主の聖画をかれらに送った」[28]。時同じくして、「フィリピンから敬虔な司祭が幼子を腕に抱く聖母と幼子を拝する聖ヨハネを描いた板絵を送ってきた。これはスペインからきたもので、色彩と人物像の冴えにおいてたぐいまれなるものがあった」[29]。

肇慶の総督王泮は当初、リッチからの進物、とくに「ローマにてみごとに描かれた聖母の小聖画」を、「かの外国人たちによって買収されたように見られのが嫌で」断っていた[30]。しかし結局は、ほかならぬ「聖母の聖画」をのちに受け取ることになるのだが——おそらくは同じものだろう——、たぶん当初と同じ理由から、みずからのもとに置かず、遠い浙江の紹興 Shaohing に

こと。ジンナーロ『東洋のザビエル、あるいは東洋の著名なキリスト教徒に関する真実の歴史』、ナポリ、1641年、I、第2部、第8章～第14章、140頁～152頁。バルトリ『著作集』、トリノ、1825年、『日本』第1巻、第10章～第11章、51頁から55頁、第2巻、第4、第23、第29章、17、94、131頁。

[26] *R.*, II, 421.

[27] *R.*, II, 437.

[28] *R.*, I, 157.

[29] *R.*, I, 158.

[30] *R.*, I, 127.

住む老父のもとに送ったのであった。

1586年初頭、ルッジェーリとデ・アルメイダが先の町〔紹興〕に来て、70歳のこの善良な老人に会ったが、かれは「礼拝堂ふうの場所を家に設け、そこに聖母の画像を安置していた。それは、われわれがここ（肇慶）で息子に与えたもので、息子はこれを父のもとに送っていたのだった。父はその場所に跪き、毎日ロザリオを唱えながら身を伏している。」[31]

1595年6月29日、リッチは河西の都、南昌に居を構え、乾斎という名の皇子と親密な友情を結んだ。おそらくは皇帝のために南からもたらされたものだろうが、とても美しい聖母画像をすでに見せていたリッチは、1595年8月20日ごろ、「銅版に」——あるいはべつのところでリッチが言っているところにしたがえば——「銅製の薄板のうえに」「油で描いた」、いちだんと芸術的な小画像をかれに贈った。これは、1590年5月25日以前、おそらくは1586年に、すでに言及した絵[32] とともにコエーリョ師からリッチのもとに送られたものである。この小画像は、跪いて祈る助祭聖ステファノ[33] ——むしろ聖ロレンツォであろう[34] ——を描いており、ニコラーオ師[35]の作品か、かれの学校のだれかの作品にちがいなかった。皇子はそれを、周囲に数多くの宝石とすばらしい金銀細工をあしらった黒檀のなかに嵌め込み、リッチに見せるために家まで送り届けた。リッチは書いている、皇子は「嬉しくてたまらない様子だった。すぐに「それ〔聖ロレンツォ〕を、周囲にたくさんの宝石のついた象牙の衝立のなかに入れさせたが、これ自体とても美しい作品であった。それから、それをわたしに見せるために家まで送ってきたのだ」[36]。まさにかれの言うとおりであって、1595年11月4日以来、リッチはこのこと、すなわち「みごとなできばえの油絵の聖母子像を持っていく」[37] ことを、中国人のもとでの大成功の要因の1つに数えられるようになったのである。

1597年から1598年にかけて、リッチがはじめて北京に赴こうしたとき、皇帝のために用意したほかの進物のなかに、「スペインから届いていた聖母の板絵」があった。フィリピンの「敬虔な司祭」[38] によって中国、すなわちマカオに送られたものである。さらにこれに加えて、そのときまでマカオにあって、リッチが皇帝に献納できるようにとヴァリニャーノが南昌に送った「救

---

[31] イエズス会師マテオ・リッチの手紙、1586年10月29日付、『カトリック文明』、1935年、IV、34。

[32] 上述。

[33] *R.*, II, 159.

[34] *R.*, II, 176, 186, 210.

[35] 上述、註25。

[36] *R.*, II, 210.

[37] *R.*, II, 208.

[38] 上述。

世主の」3幅対祭壇画があった[39]。南直隷[40]の州を通る際、巡撫の趙可懐[41]なる人物がかれを句容[42]にあった館に招いた。しばらく前から大ヨーロッパについて語られるのを耳にしていたからである。リッチは招きを受け入れ、皇帝にもっていく贈物のいくつかをかれに見せるために、「ガラスで覆われ額縁に収められていた、とても美しい救世主の板絵を〔中略〕自分で持っていった」。

この絵が、巡撫のみならず、かれの配下全員に与えた印象は強烈だった。リッチは語る、「はじめて神父〔＝リッチ自身〕がそれを見せたとき、巡撫は自分の部屋にいた。かれは唖然とした様子のまま、その板絵をしっかり見ようともせず、両の手で2枚の扉を覆った。神父は、それを見ようともしない理由がわからず、かれに言った、『殿下、これはまさしく天と地の主、神の画像にほかなりません。』——巡撫が応えて言う、『そんなことをわたしに説明する必要はない、この絵じたいが死すべき人間の画像ではないことを物語っているのだから。ただ、ここはこの画像を見るにふさわしい場所ではない。』このあとかれは廷臣に命じて、かれがいつも天を崇め礼拝する、館のもっとも高くりっぱな場所にある礼拝堂のなかに祭壇をつくらせた。そこは、細工や絵がほどこされた、じつにりっぱな造りであった。〔中略〕この祭壇のなかに香を焚く粋な炉とともに救世主の板絵が安置されると、かれは高価な祭式用の衣装と徽章を身にまとって礼拝をした。4度跪き地面に頭をつけ、さらに何度も身を起こしてはまた頭をひじょうに低くして身をか

---

[39] *R.*, I, 280.

[40] 都市と同名の州とを区別するために、前者をNanchino（南京）、後者をNanking（南直隷）と呼ぶことにする。Pechino（北京）とPeking（北直隷）についても同様の規則にしたがう。

[41] この1節で問題になっている南直隷の州の巡撫について、手稿上で確認したところ、リッチは3度にわたって確かにCiaocotai（*t*が入る）と呼んでいるのだが、本来ならCiaocohai（*h*が入る）と書くべきであったことはほとんど疑いないと思われる。実際この官吏は、姓を趙、名を可懐、字を寧宇および徳仲、さらに號を心堂といった。四川の巴縣、すなわち重慶の下級身分の親から生まれ、1565年に学位を得たあと、ほぼ40年間にわたって政府の重職にあった。最初に山東にある汶上の郡長〔令〕、そして司法省次官〔刑部侍郎〕、その後1570年には河西の州検閲官〔御史〕に任命され、さらには軍事省次官〔兵部侍郎〕、福建、陝西、南直隷、北直隷の総督〔巡撫〕（福建は1582〜1585、Shensiは1589〜1590、南直隷は1594年12月12日）、ついには公共事業省次官〔工部侍郎〕（1598年8月5日）に任じられた。こんにちの湖北で宦官陳倬〔奉〕の反乱を鎮圧したあと、かれは軍務大臣〔兵部尚書〕の職にまで昇進した。しかし最後は、1604年11月16日、蘊珍という名の叛徒によって武昌で暗殺された。かれに対しては国葬が営まれ、世襲皇子大守護者〔太子太保〕という死後の称号が与えられた。かれは万人に慕われて生き、貧しく死んだ。以下を参照のこと。『乾隆巴縣志』第9章10葉*b*〜11葉*a*、『道光重慶府志』第8章28葉*b*〜29葉*a*。禹貢、11頁および14頁註54。かれの名は『明史』に繰り返し出てくる。第4章31葉、237章6葉*b*（かれの暗殺については、同書第21章5葉aに言及されている）、第116章17葉*a*。

[42] リッチがはっきりと言っているように、この事が生じたのは句容であって、Sepp SCHÜLLER博士が『キリスト教使節』*Die christlichen Missionen*（1936年、3〜8頁）に載せた論文「マテオ・リッチ師とキリスト教使節団」«P. Matteo Ricci und die christlichen Missionen»（5頁）で言っているように蘇州においてではない。

がめるのであった。こうしたあと、正面にいようとせずに、側面に立って長々とそれを眺めていたが、ふかく感嘆して場所から立ち去ることもできなかった。神父がそこにいるあいだ、ずっと絵をそこに置き、部屋係に毎日香炉に火を入れ香を焚く役をさせ、家のほかの者もまた毎日同じことを繰り返した。

この間、巡撫は毎日、この驚異の品を見せるべく要人を案内してきたが、そのなかに南京州の学校総監、陳子貞[43] がいた。かれはその後北京で神父〔＝リッチ〕の親友になり、福建州の巡撫になった。

神父も1日中この礼拝堂のなかにいて、聖務を執り行い、神に祈りをささげた。」[44]

リッチは1598年9月に北京に着いて、旅行のあいだに聖母の絵が1部痛んでいるのを見て残念がった。しかし、中国人のあいだではこれによってますます価値が高まるばかりであった。かれらはその損傷ゆえに絵をひじょうに古い作品と信じ込んだのである。皇帝に献上する貢物の担当を任されていた宦官が「見たものは、わが総会長から送られた救世主の板絵、中国では見られることのなかったハープシコード、三稜鏡2個、そしてスペインからきた聖母の板絵であった。聖母の板絵は、港から陸路でこの都市まで搬送されるあいだに、これを運んだ者たちの不注意から、はずれて絵の描かれた3枚の板になってしまっていた。われわれのあいだでは何の価値もなかろうが、中国にあってはその価値をほとんど失わなかった。というのも、神父らがそれを古い絵と呼び、このように痛んでいることでかえって完全で新しいものより価値のあるものとみなすにいたったからである。品物はすべて宦官にも周囲の者たちにもおおいに気に入られた」[45]。

とはいえ、北京に居住する時にはまだ至っていながった。リッチと仲間のラッザーロ・カッタ

---

[43] この官吏は姓を陳、名を子貞、字を以生といった。河西にある、南昌近くの南岡里に生まれたかれは、1580年に学位を得て、すぐその後、南直隷にある漂水の郡長に任命された。それから福建の検閲官〔御史〕、ついで総督〔巡撫〕の職に昇進するが、この職を健康上の理由から辞した。その後、南直隷の学校視察官となり、この期間にリッチが本文で語っていることが生じたのであった。7年にわたってこの職にとどまったが、持ち前の卓越した知性と貧者に対する気前のよさで学生たちから感謝を集め、のちに学生たちはかれに敬意を表して寺を建立した。視察官から帝国厩舎副長〔太僕少卿〕へ、ついで通信委員長〔通政使〕の職へと移るが、もちろんこれは北京でのことであって、リッチが言っているように、この地でかれはこの宣教師の親友になった。最後は、これまたリッチが付言しているように、再度福建の巡撫に任命された。病気になって、かれは3度辞職を申し出たが、受け入れられることはなかった。巡撫として没し、国葬が営まれ、軍事省次官補〔兵部右侍郎〕という死後称号が与えられた。以下を参照せよ。『南昌縣志』第18章10葉b～11葉a。『乾隆南昌府志』第54章4葉b。『同治南昌府志』第41章40葉b。この最後の2つの伝記は同1で、最初のものとほとんど違わない。

[44] *R.*, I, 287-288.

[45] *R.*, I, 298.

ーネオ[46] は自分の来た道を帰らなければならず、帝国運河を下り、南京に身を落ち着けた。このことのために落胆するということはなく、目的地はつねに同じまま、北京に、そして皇帝の宮廷に入ることであった。

北京への再度の旅行をもっとうまく準備するために、カッターネオはリッチを南京に残してマカオまで行った。1599年10月12日、そこから総会長に手紙を書いて、「見つけられる最良の絵描き何人か」と優秀な学者をひとり求め、そのままで中国への入国と居住が得られることを約束した。かれは上司に「皇帝に献上するために、何幅かの油絵、それも可能なかぎり大きな傑作を」、さらに自分の友人や後援者用のもっと小さな絵もあわせて送るよう嘆願したのである。くわえてかれは言う、中国人は実際、「聖母の画像、たとえば天と地の女王にして神の母のような画像はいうまでもなく、救世主の画像とかれの生涯の神秘のそれを」も深い尊敬をこめて崇める、と。

---

[46] かれは1560年、よくジェノヴァと言われているが、そうではなくサルザーナにある貴族カッターネオ家に生まれた。イエズス会志願者がサン・タンドレア・アル・クイリナーレの修練院にもたらした物品を記載した古台帳には、タッキ・ヴェントゥーリが指摘しているように（*R.*, I, 239頁、註1)、これまで知られていなかった、かれが修道院に入った月日が保存されていた。「ラッザーロ・カッターニオは1581年2月の27日に来たる」（『修練院入所録』*Lib. Ingres.Novit.*, 1569年～1594年、73b)。「ラッザーロ・カッターネオ」という本来の名前が自筆の署名によってそこに書かれている。1586年、日付のないある手紙のなかで、ポルトガル管区長であったセバスチアーノ・モラレス師は、総会長にかれについてこう書いた。「ラッザーロ・カッターネオ修道士は、ここ〔リスボン〕にとどまるようにとの司教様からの通知が来てのち、エヴォラに赴き、いまそこで自分の勉強をつつがなく続けています。」（*ARSI, Lus.*, 69, f. 329 *b*)。同じこの管区長は、1587年4月1日に、やはりかれについてつぎのような情報を与えている。「ラッザーロ・カッターネオ、トスカーナ地方サルザーナ生まれ。26歳で第7教団に属す。学芸の全講義を聴き、神学2年目に入る。ローマの教団では司厨長であり、ローマの神学校では学監であった。」（*ARSI, Lus.*, 44, f. 7 *a-b*)。1604年にマカオで作られた目録（*ARSI, Jap.-Sin.*, 25, f. 79）では、かれは年齢43歳、23年間の宗教生活を送っており、哲学および2年間の神学を修めて、1596年に4つの誓いの表明をしたとされている。ニコロ・ロンゴバルド師が作った1621年11月24日の目録には、つぎのようにある。「イタリア人。サルザーナの人。61歳になる。頑強で良好なる健康状態。会に40年在籍。会での勉強は、人文学1年、哲学3年、神学2年、くわえて個人での勉強。1年間修練長になり、ゴアの教団長、漁夫海岸布教の上長、マラッカの教団を訪問し、28歳で中国使節団に入り、しばしば現地の長となった。1596年5月26日、4つの誓いの表明を行う。」（*ARSI, Jap.-Sin.*, 134, f. 301)。1595年、ヴァリニャーノによってゴアで仕事に就くことを認められており、補完的な勉強も免除されていた（アックァヴィーヴァ宛のヴァリニャーノの手紙、1595年12月6日付、*ARSI, Jap.-Sin.*, 12, f. 327 *b*)。Culam で9ヶ月過ごしたあと、1589年11月末に漁夫海岸布教の上長に任命されたが、これはTuticorim から1589年12月5日に書かれた、総会長宛のかれの手紙の1通によって明らかである（*ARSI, Goa*, 13, ff. 457-461)。1593年の中国旅行のあいだ、管区長の命で、マラッカの教団を訪問した（*ARSI, Goa*, 14, f. 131)。1593年5月26日、中国に到着すると、広東州のポルトガル人の礼拝堂でジャコーモ・ピント師の手によって、4つの誓いの表明を行った。*ARSI, Lus.*, 2, f. 139 *a-b* にある誓願表明についての資料を参照のこと。上海で大規模に栄えたキリスト教信仰は、1608年9月、かれが礎を築いたものである。

要するにかれは、あとで述べるナダールの挿絵入り福音書の出版をすでに知っており、「キリストの生涯の画像のある新しい書物と、これとはべつに技巧を凝らした類似の品々」[47] を要求していたのである。

中国の皇帝のもとに教皇大使館をおく計画は、ミケーレ・ルッジェーリ師のローマ派遣とともに、1588 年、ヴァリニャーノによってすでに研究されていたが、当時マカオのイエズス会士たちの心中にふたたび浮上した。このことについては、年長のマヌエル・ディアス院長が、1599 年 12 月 12 日付で総会長に宛てて書いている。かれが要求したのは、将来の大使たちが「油絵を何幅か、それも色使いのよい、じつに優れたものをもってくることだった。なぜならば、中国人はそれ以外のものには満足しないだろうからである」。とくに、「救世主、かれらが聖ルカのとよぶ聖母、昇天する聖母、3 博士の礼拝、ほかに教皇冠をかぶった教皇聖グレゴリオ、司教冠をかぶった聖アンブロージョ、司祭帽をかぶった聖ヒエロニムスなど、威厳のある何人かの聖人の絵」をかれは奨めている。「なぜなら、中国の貴族はこうした厳かな外見を重視するから」である。大きな絵は皇帝に、小さな絵は皇后とそのほかの高位の人々に与えられるだろう。もし「さまざまな色合いの羽毛で」つくられたメキシコの絵があれば、それは最高にちがいない。しかし、やはり必要なのは教皇の肖像画だろう[48]。おわかりのように、もとめられていたのは本物の絵画館なのである。

1600 年 5 月 19 日、リッチは南京を発ってふたたび北京への旅に出た。皇帝のために持参する進物のなかに、「3 幅の油で描かれたとても美しい画像があり、それは高さ半カンナ〔1 カンナは地方によって差があるが、2〜3 メートル〕近くある大きいのが 2 枚と小さいのが 1 枚であった。大きな 2 枚のうちのひとつは聖ルカの手になる民衆の聖母の人物絵でかつ肖像たりうるもの、2 枚目は、幼子イエズス、聖ヨハネとともにある聖母のそれであった。3 枚目はより小さな救世主である。3 幅ともたしかな腕で描かれたものであった」[49]。当時南昌の院長であったエマヌエル・ディアス師は、この最初の絵を贈呈していたが、そこに描かれていたのは「サンタ・マリア・マッジョーレの様式のとても大きな画像であり、ローマから届いたもので、とてもよく描かれていた」[50]。1601 年 1 月末に皇帝萬暦[51] がこれらの絵を見たとき、「呆気にとられたままこう言った、『こ

---

[47] *ARSI, Jap.-Sin.*, 13, f. 319 *b*.

[48] *ARSI, Jap.-Sin.*, 13, f. 359 *a*.

[49] *R.*, I, p. 347, n. 4.

[50] *R.*, I, 339.

[51] 当時中国では、皇帝朱翊鈞（1563〜1620）が神宗という王朝名で、また萬暦という治世名のもとに治めていた。かれの治世は 1572 年に始まっており、リッチが没して 10 年後、1620 年 8 月 18 日に終わることになる。かれは、帝の宦官と側室以外にはだれにも姿を見られずにいたから、ずっと以前から謎につつまれていた。1612 年の年書簡が言うように、「大きな体格でかつ畸形、外部

れは生きている pagode[52] だ』。この言葉はかれらの言い方では『これは生き神だ』というのに等しかろう[53]。そうとは知らず真実を言い当てたのである。というのも、かれが崇めていた他のものは死せる神なのだから」。この呼び名は画像の名称として残り、結果としてそれらを贈呈した神父の呼び名としても残ることになった。かれらはふだんから「生き神を贈った人たち」[54] と呼ばれるようになったからである。それどころか、絵の生き生きとしたさまが萬暦に与えたきわめて衝撃は大きく、かれは絵を恐れ、それゆえ「薫香」をもってそれらを崇拝したあと、「わが総会長殿が神父たちに送ってくださった救世主の小さな画像」を手許におき、ほかの2枚の絵、すなわち「ローマの民の救済」と「幼子と聖ヨハネのあいだの聖母」は厄介払いして、皇太后に送ろうとした。ところが皇太后も恐れをなしたので、宝物庫に納められ、「現在（1609年）までそこにあって、多くの廷臣がそれらを観にきている」[55]。

聖母の第2の絵についてリッチは、同じ時期か少し後に、もう1枚の模写[56] をもっていた。1605年6月24日、洗礼者聖ヨハネ祭に、北京の自分の礼拝堂の祭壇に「一方に幼子イエス、他方に」「これを跪いて礼拝している」[57]「洗礼者聖ヨハネのいる大きく美しい聖母画像」[58] を置いていたからである。こんにちでもなお、ローマのジェズー教会の古い誓願院にある聖イグナチオの住んでいた小部屋、かれの死によって聖別された小部屋には、聖ヨセフ、幼子とそれに向かって跪く洗礼者聖ヨハネとともにある聖母を描いた絵が大切に保存されている。それに向かって聖イグナチオは祈り、ミサを挙げるのがつねであったことは、文書が証言しているとおりである。「この聖母の似姿は、聖イグナチオの手によって、かれが神の館の礼拝堂の暮らすあいだ大切に保管された。瀕死のときにあっても、公の礼拝に供し、人びとの視線に守られ、そのあと同じ聖なる場所に部下によって保管されるのであった。外の者にも敬虔に崇敬され、ついにはヴァチカンの修道士たちによって1576年に厳かに2つの花輪が飾られた。」中国いる聖イグナチオの同胞たちのもとにまで届いていたのは、おそらくこの絵の、聖ヨセフを欠いた模写ではなかろうか[59]。い

の人間に見られるのを恥ずかしがっていた」からである（*ARSI, Jap.-Sin.*, 113, f. 225 *a*.）。

[52] 「神」の意味。ほかでもリッチは「これはかれらの神である pagode」と書いている（*R.*, I, 350）。

[53] 画家の汪啓淑も、その著『水曹清暇録』の第4章で、北京の教会にリッチが展示した絵について語り、こう指摘している。「遠くからみると、それはまるで生きているようだった。」遠望如生（禹貢による引用、80 *a*）

[54] *R.*, I, 366.

[55] *R.*, I, 366.

[56] 1603年ごろ、マカオからわれらが宣教師のもとに「4邸の大祭壇用に金箔がはられ4枚の絵が、支えと美しい作品とともに」送られたことをわれわれは知っている（*R.*, I, 450.）。これらの1枚がまさに文中で問題になっている絵であったかもしれない。

[57] *R.*, I, 468.

[58] *R.*, II, 291.

[59] すでに見たように、「幼子を腕に抱き、幼子を礼拝している聖ヨハネとともにある聖母の板絵」

ずれにせよ、1605 年の同じ 6 月にこの聖母は、ユダヤ人ヌガエティエン〔艾田〕[60] によって、息子ヤコブとエサウのあいだにいるレベッカと取り違えられた。

リッチが萬暦に贈呈した聖母の絵の歴史を、われわれは 17 世紀後半初頭にまで追うことができる。ミケーレ・ボイムは『中国帝国略述』*Brevis Sinarum Imperi Descriptio* と題された 1650 年から 1664 年にかけての手稿でつぎのように証言している。「帝国の宝物庫には二枚の絵画、すなわち救世主キリストの絵とサンタ・マリア・マッジョーレの絵があって、マテオ・リッチ師がいまの皇帝の祖父に贈ったものである。その同じ年（1601 年）、皇帝は財務省に、それらを壮麗に飾ってから[61] 公共の広間に展示するよう命じた。」ボイムが続けて言うには、崇禎の時代、1640 年、アダモ・シャル・フォン・ベル師が皇帝に、中国語版[62] のナダールの『イエス・キリストの生涯』*Vita di Gesù Cristo* の画像を贈ったところ、皇后が「崇禎にこれらの画像の 1 枚を求めた。しかし、皇帝がそれを本から切り取ることも、皇后を喜ばすのを断念することもできなかったので、マテオ〔リッチ〕師が祖父に贈ったサンタ・マリア・マッジョーレの絵を彼女に与えた。かくして〔中国の〕王妃は〔天国の〕王妃とともにあることにご満悦であった」[63]。同じボイムによれば、この絵に向かって首相のアキッレーオ・龐天壽（Ppamttiensceu）は毎日、皇后すなわち永暦の妻と、永暦の父である亡き皇帝の妻たちに、まだ洗礼前であるのにもかかわらず「わが主」、「アヴェ・マリア」、そして「クレド」を唱えさせていた。この同じ絵の前で、3 人の女性はコッフレル（Koffler）師によって洗礼を受け、それぞれアンナ、エレナ、マリアというキリスト教徒としての名をもらった[64]。

（*R.*, I, 158.）はスペインからフィリピンをへてきたものだった。2 枚の絵、すなわち聖イグナチオの部屋の絵とフィリピンを経由して中国に来た絵は、スペインの同じ起源に由来するものなのかもしれない。というのも、聖イグナチオの部屋の絵はひじょうに古く、聖人がこれを自分の生国からもってこさせていた可能性もあるからである。

[60] 参照 PELLIOT, *Le Juif Ngai, informateur du P. Mathieu Ricci in T'oung-pao,* 1920-1921, 32-39.

[61] 〔この部分のもとになったラテン語原文は以下のとおり（訳者）〕« Erant in thesauro Imperiatoris duae imagines Christi Salvatoris et S. Mariae Majoris, quas Vener. P. Matthaeus Riccius avo ipsius obtulerat ; has eodem anno Imperior Tribunali Operum (工部) praecepit, ut quam pulcherrime exornatas in publica aula reponeret »（*ARSI, Jap.-Sin.,* 77, f. 50 *b.*）。

[62] 後述。

[63] 〔この部分のもとになったラテン語原文は以下のとおり（訳者）〕« Imperatrix petierat ab illo [Cciomcem] unam ex illis imaginibus ; verum cum illas develli neque etiam auderet negare, obtulit illi S. Mariae Majoris imaginem, quam P. Matthaeus [Ricci] illus avo Vam-lie［=萬暦］donaverat; contenta mansit regina cum Regina » (*Ibid.,* F. 51 *b*).

[64] *Idem ibid.,* f. 57 *b*. この皇室の改宗については、筆者の中国カトリック布教小史を見られたい。*The catholic Missions in China,* Shanghai, 1934, 46-47.

訳者附記

ここに訳出したのは、Pasquale M. D'Elia, *Le Origini dell'arte cristiana cinese (1583-1640)*, Reale Accademia d'Italia, Roma, 1939 の第 3 章までの部分である。全体は 8 章からなり、中国風に描かれた聖画が原画とともに登場するのは後半で、今回掲載の部分はいわばその導入部にあたる。

デリアのイタリア語自体はそれほど難解ではないが、仏文専攻の訳者にとってイタリア語は専門外であるうえに、引用部分がすべて 16 世紀の言語であり、ラテン語、スペイン語、ポルトガル語等の入り混じるテキストであることから、思いのほか手間取った。もとより訳者の力量をはるかに超えた冒険であり、思わぬ誤訳や誤解もあろうかと思う。ご批判、ご教示を仰ぎたい。いずれなんらかの形でまとめる際に、訳註等も含め、全体を整えたいと考えている。なお、翻訳にあたっては、とくにリッチ、セメードの『中国キリスト教布教史』(全 2 巻、岩波書店大航海時代叢書)、平川祐弘氏の『マッテーオ・リッチ伝』(全 3 巻、平凡社東洋文庫) にずいぶん助けられた。

稚拙な訳文を積み重ねつつ宣教師たちの夢の跡を旅するのは、雑務に追われる日々のなか、しばしの楽しみでもあり、慰めでもあった。すぐ隣の個研で毎日研究にうちこんでおられる内田慶市先生には、貴重な機会を与えてくださったことに深く感謝する次第である。なお、先生の前書きにもあるように、これは平成十四年度学部共同研究の成果のひとつである。

柏木 治